

主人公が演じた「働く」という行為

—夏目漱石『門』・村上春樹『スプートニクの恋人』をめぐって—

国立台湾大学

范 淑 文

1. はじめに

『三四郎』の広田先生、『それから』の代助、『こころ』の「先生」など、漱石文学の主人公はよく高等遊民として設定されているのは贅言するまでもないことであるが、その中でも殊に、『それから』の代助の場合には小説のモチーフにダイレクトにつながるほど鮮明に描かれている。次の作品『門』を含め漱石の初期三部作として読むなら、それまで父親の仕送りで高等遊民として生活してきたがいわゆる「自然」を全うするために社会に妥協し、仕事を探すことに思い立った代助のその後の行方は、『門』の宗助にある程度託されていると見なしてもよからう¹。そのような文脈の流れにある『門』の宗助はどのように恋の相手である御米のために、二人の生活を支えるように働くのかは興味深いところである。

これとは別に、漱石より約 80 年後の現在に活躍している村上春樹の作品にも偶然にも高等遊民—ニート—を主人公として登場させる作品が存在する。『スプートニクの恋人』がその一つである。すみれという主人公は、大学を中退して小説家を目指そうとしながら、作品が一つも書けなかった。ところが、ある事がきっかけで作家になるのを諦め、OLになったというユニークなキャラクターである。そのようなすみれはどのように社会に生き、そして OL に変身したのかそのプロセスは意味深い。

拙稿では、両作品の主人公が同じ高等遊民という視点から、どのようにその「働き」を演じているか、あるいはほかの登場人物の「働き」がどのように語られているか、それぞれの「働き」は作品にどのように位置づけられているかなどを明らかにすることを試みたい。

2. 『門』にはどのような「働き」が語られているか

言うまでもなく、主人公宗助と御米二人の過去の「罪」に重点を置く理解が『門』の通常な捉え方²である。それを踏まえて、「僕は、安井とは、幸福な夫婦の不安の象徴としての存在だと考える。(中略)安井を裏切った罪の男女の「奇妙な運命」を「門」の本質的なモチーフだと僕は考えない。」という内田

¹例えば、片岡良一は「とにかく作者はこの作に描かれた主人公夫妻の生活を、『それから』からの制約に従って、彼等の犯した罪故明るい社会の外側にはみ出した、暗くわびしいものとしている。が、その罪を責められて社会からはじ出さねばならなかった過程は、ここにはあまり立ち入っては書かれていない。その罪故の傷口さえ、時の作用でほとんど癒着したようなかたちになっている。」と『門』と『それから』の関連性に言及している。(['門』『漱石作品論集成 第 7 巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991. 10、桜楓社、P9) 一方、『門』と『それから』をそれぞれ独立した二作として見なしている西垣勤説もある。(西垣勤『門』『漱石作品論集成 第 7 巻』)

²最も代表とされるのは「宗助は、自分が住んでゐる場所と季節とのやうに、陰刻な冬空を頂いて、じめじめした、暗い寒い心を引摺つてあるいて行く。——漱石が自分の分身としての宗助を描かうとした根本は、宗助の世界のこの点にあつたのではなかつたかと思はれる。」という小宮豊隆の見解であろう。(小宮豊隆『漱石と芸術』1973. 4 (第一刷り 1942. 12)、岩波書店)、P189)

道雄説³や「宗助とお米の平凡な日常の描写のかけから、作家の幸福な視線がのぞかれる。そのような視線に、ぼくらは魅せられるのだ。」「罪」の物語でなく、「罪」の回避の物語であるように、その作者の姿は、宿命的な「罪」の主題を掲げながらそれを回避しようとして、自らの低音部に暗い牧歌を奏でている傷ついた夢想家の姿である。」⁴という江藤淳説、「一方は安井の影が夫婦の胸の裡に与えるかげりとして、他方は人員整理問題、小六の問題が夫婦の物質的生活に与える影響として、親和と飽満の愛の世界の背後にたえず不安のトーンを響かせている。」⁵という深江浩の「不安」説など、その「罪」の持つ意味を更に深く掘り、そこから展開していく主人公の姿勢や心理に焦点を合わせた見解⁶が続出している。また、宗助たちの生活の支えである役所の仕事にも注意を払い、「下級官吏の生活に甘んじ、むしろ役所の改革や淘汰、あるいは増俸の噂を気にしながら、役所と家庭との間を往復している。二人にとって、社会の存在は日常の必要品を供給する以上の意味をもっていない。」⁷という、作品における宗助の仕事の無意味さに触れる瀬沼茂樹の論究を挙げることができる。

前述したように、『門』を漱石の前期三部作として読むなら、『それから』の最後代助の仕事探しに思い立ったあの名場面を想起し、つまり代助のその後の行方—の

『門』の宗助の仕事—toに誰しもの興味を持つだろう。

2.1 語られていない宗助の仕事振り

独立して御米との生計を支えている宗助は友人の斡旋で福岡から東京に引越し、東京の役所で仕事をしていると語られている。そのような宗助は仕事場でどんな仕事に携わり、どんな仕事振りなのか、気になる。宗助の出勤関連箇所を以下に抜粋しておこう。

- ・宗助は朝出て四時過に帰る男だから、(1 章)
- ・毎日役所の行通には電車を利用して、賑やかな町を二度づゝは屹度往つたり来たりする習慣になつてゐるのではあるが、(中略) 七日に一返之休日が来て、心がゆつたりと落ち付ける機会に出逢ふと、(2 章)
- ・毎日役所へ出ては又役所から帰つて来た。帰りも遅いが、(4 章)
- ・それから二三日すると丁度土曜が来たので、宗助は役所の帰りに、番町の叔母の所へ寄つて見た。(中略) 晩食を済まして、夜は近所の縁日へ御米と一所に出掛けた。さうして手頃な花物を二鉢買つて、夫婦して一つ宛持つて帰つて来た。(4 章)

³内田道雄「『門』をめぐる一夏目漱石論(二)」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991.10、桜楓社、P25

⁴江藤淳「『門』—罪からの遁走」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991.10、桜楓社、P19

⁵深江浩「『門』論」『漱石作品論集成【第七巻】』1991.10、編者赤井恵子・浅野洋、桜楓社、P92

⁶他には、「宗助の家は、「外側の都市空間にそくした座標軸によつては規定しえない場所、名づけられない場所」なのだが、あえて名づけるのなら、彼らが住んでいる場所は、内なる植民地なのではないのか。」とあるように、主人公の生活態度や空間を一種の「植民地」の隠喩とする捉え方もある。(押野武志「『平凡』をめぐる冒険 『門』の同時代性」『漱石研究 17 号』編集：小森陽一・石原千秋 2004.11、翰林書房、P39)

⁷瀬沼茂樹「『門』」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991.10、桜楓社 (P32、33) (初出『夏目漱石』近代日本の思想家 6、1962.3、東京大学出版会、『夏目漱石』UP 選書、1970.7、東京大学出版会)

- ・翌日眼が覚めて役所の生活が始まると、宗助はもう小六の事を考へる暇を有たなかつた。家へ帰つて、のつそりしてゐる時ですら、此問題を確的目の前に描いて明らかにそれを眺める事を憚かつた。(4 章)
- ・宗助は心配した。役所へ出てゐても能く御米の事が気に掛つて、用の邪魔になるのを意識する時もあった。(中略) 午過に帰つて来て見ると、御米は金盥の中に雑巾を浸けて六畳の鏡台の傍に置いてゐた。(6 章)
- ・次の日宗助が役所の帰りがけに、電車を降りて横町の道具屋の前迄来る (9 章)
- ・火鉢に倚つたなり、宗助の帰りを待ち受けた。
宗助は例刻に帰つて来た。(11 章)
- ・役所では用が手に着かなかつた。(中略) 宗助はたゞ早く帰りたかつた。(17 章)

やや長くなつたが、上掲の宗助の出勤関係の描写や春に行われたリストラで宗助は「生き残つた」、しかも月給が五円上がったという終盤の語りなどからでは、宗助は基本的には遅刻はしない、休みも減多に取らない、仕事能力もそこそこできるサラリーマンと言える。が、一方、「例刻に帰つて来」ることや、「用が手に着かな」い姿、また「早く帰りた」い、「官吏の増俸問題」「局員課員の淘汰」以外に仕事の内容に一切触れない、などの仕事態度の描写からでは、宗助は役所の仕事に熱心であるどころか、全然関心を持っておらず、単なる生計を立てるための労働を提供してその報酬をもらうという労資関係に止まっているというしかない。そのような状態の下では、勿論残業をするはずがない、休日出勤もしない。つまり、仕事場との関わりを必要最小限に抑えているのは明らかである。のみならず、「『門』の特に前半は、日曜と土曜の午後の時間で小説が構成されていると言ってもいい。」⁸ という石原千秋の指摘の通り、後半の宗助の参禅を除いた物語の大半は、宗助が御米との日々の暮らしや大家との付き合い、つまり仕事場以外の場面で構成されている。厳密に言えば、石原千秋が言う「日曜と土曜の午後」だけではなく、退勤後の平日の夜や朝の時間も含まれている。更に「出勤に出掛けた」という淡々とした表現の次に御米の様子に焦点を合わせたり、またすぐ帰つて来る場面に切り替えたりするのが目立っている。役所にいる宗助の描写は、家にいる御米の様子を案じている、仕事に手がつかない不安の様子、などの語りに止まっている。それ以上の描写は見当たらない。これは、語り手が意図的に宗助の働き振りに対して口を噤んでいるとしか思えない。

このように、役所に勤務しながらもその様子が全く語られていないことについて、西垣勤は「これは毎日弁当持参で役所に通う下級官吏のわびしげな感想に過ぎまい。」「役所仕事は食うためだけのものであり何の意義もない」⁹と、代助の役所勤めに厳しい批判を下している。繰り返しになるが、『それから』の代助—政府官吏と関わって儲けようとしていた父親を批判していた代助—のその後の成りの果てとして、『門』の宗助を見なせば、宗助と御米が犯した「罪」の償いとして、敢えて一番嫌がっていた役所(官

⁸石原千秋「〈家〉の不在——『門』論」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991.10、桜楓社、P239

⁹西垣勤「『門』」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991.10、桜楓社、P39

僚によって汚されている場所）で働かせると捉えられないこともなかろう。しかし、一方では、そのような苦境に置かれている宗助にその仕事場での人間関係に煩わさないで済むように、代わりに家で御米と労わり合う時間をたっぷり与えることで宗助を労っている語り手の暖かみも伺える。とはいえ、役所に背を向けている宗助は「来年度に一般官吏に増俸の沙汰がある」「その前に改革か淘汰が行はれる」（11 章）と、さり気なく官吏の「増俸」と、平社員のリストラの噂を語るのは、『それから』の代助ほど辛辣ではないが、それでも批判の姿勢を構えているのは明らかであろう。ただし、『門』では、戦う気力が乏しいせいか、宗助の場合、仕事を程々にこなせる安月給の一サラリーマンの心細い姿がありありと描かれている。活気が一切感じられないし、憐れな平社員の姿が寧ろクローズアップされている。

2.2 語られている家での「働き」

前述した通り、宗助の役所での仕事振りは殆ど語られていない代わりに、宗助が出掛けた後の家の様子がよく語られている。それが最も鮮明なのは、宗助が叔母のところから貰って来た父親が残してくれた抱月の絵が描かれている屏風を御米が売ろうと図り、古道具屋を訪れる場面である。

広島以来かう云ふ事に大分経験を積んだ御蔭で、普通の細君の様な努力も苦痛も感ぜずに、思ひ切つて亭主と口を利く事が出来た。（中略）斯う簡易に受けられると、此方から頼む様にしても、見て貰はなければならなかつた。

「可うがす。ぢや後程伺ひませう。今小僧が一寸出て居りませんからな」（6 章）

宗助が役所に行った後、「不断着の上へ、妙な色の肩掛とも、襟巻とも付かない織物を纏つて外へ出た。」との描写から、御米は何の迷いもなく、軽い気持ちで古道具屋に向った様子が想像できよう。普通なら、男の人にとっても質屋に等しい古道具屋には入りづらいものだが、御米は生活のために広島に住んでいた時より、何回も質屋に出入りしていた経験（『それから』の三千代も同じ経験を持っている）を積んだお陰で、古道具屋に入るのを苦痛とも思わないし、古道具屋の亭主と気楽に「口を利く」ことが出来たのである。用事で出掛けていた小僧が店に戻って来てから、亭主は御米の家を訪れ、屏風を見た後、六円を出すと言ったが、一円でも多く貰いたい御米は暫く躊躇してから、「でも、道具屋さん、ありや抱一ですよ」と答えた。その実、抱一がどれほどの価値があるのかははっきり分からず御米はその場では屏風を手放さなかった。宗助と相談したりした御米との交渉は、古道具屋が三度目に足を運んだ時に、ようやく 35 円で屏風の売買が成立した。宗助の役所への勤務や退勤が単なる時間の印しとして淡々と語られるが、一方その後、町へ赴き、古道具屋に入り、店の亭主と商いの交渉などをする御米の動きがずっと語りの焦点とされている。

屏風売買以外に、御米が焦点になっているのは、小六と障子の張替えに取り組んでいる場面である。

「小六さん、茶の間から始めて。夫とも座敷の方を先にして」と御米が聞いた。

小六は四五日前とうへ兄の所へ引き移つた結果として、今日の障子の張替を手

伝はなければならない事となつた。（8 章）

第 8 章の冒頭に行き成り、小六への御米の発話から始まっている。御米の提案で宗助夫婦が弟小六を引き取ることになり、小六が引越してきた四、五日後の朝、御米が小六と障子の張替えに取り組んで

いる場面である。宗助が役所に出掛けた後の家の様子が焦点になって語られている。御米が気を遣いながら、小六と一所に障子の張り替えの仕事に励んでいる様子以外に、「この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合せながら、口を動かすのが、御米に取っては一種異な経験であつた。」という、それまで夫以外の人と一緒に膳を共にすることのなかった御米がそのような状況に置かれた苦しさ、大変神経を使う辛さが細やかに語られている。

御米が小六と共に過ごした障子張替えの昼間には宗助は全然登場していない。

「平日が男（労働者）が主役の空間なのに対して、日曜の都市は女／子供（消費者）が主役の空間なのである。」¹⁰という、石原千秋の都市の平日・休日の論説にはこの場面は当て嵌まらない。生計のために役所に働きに行っているため、この家庭の生産者である宗助は現れていないが、逆に、休日の「消費者」と称される女である御米が家に居ながら労働者一心身とも懸命に働いている正真正銘の労働者—の姿として捉えられ、その動きが隠さずに語られている。

屏風売買の御米の本領を合せ考えれば、男性描写が堪能で、そこに常に力を注ぐ漱石にしては、『門』における主人公と仕事の設定は異例であると言えよう。御米の屏風売買が一種のビジネス能力のように見なされ、そして障子の張替えなどの家事に励んでいる女性の「働き」も男性の「働き」に劣らないほど、家庭における重要な女性の存在は正に生産者同等のものと見なすべきだという漱石の眼差しが『門』では伺えよう。

3. 村上春樹『スプートニクの恋人』に織り込まれている「働き」

小説家になろうと決心したすみれは、面白くない大学を中退して唯一の友達である「ぼく」を相談相手として時々夜中に長電話をするが、「ぼく」を異性として全く感じない。一方、小学校の教師である「ぼく」の方は、何人かの女性と関係を持ちながら、すみれのことをいくら話しても飽きない、「誰よりもなによりも大事な人間」（P293）と思っている。このような状況のすみれは、ある日、在日韓国女性企業経営者のミュウに出会ってから、「生れて初めて恋に落ちた」（P7）。それまで仕事をした経験のないすみれは、ミュウに誘われてミュウの会社に入って OL になった、というのが『スプートニクの恋人』の前半の粗筋である。

さて、それまで「ぼく」以外に友達がいなかった、否、正確に言えば人と関わりたがらず、社会との繋がりを拒否し続けていたすみれが、最も典型的な一社会人としての生き方に切り替えた背後には相当の誘因があるのは推測できるだろう。すみれの身の上や心理などがどのように変わったのか、その仕事振りに焦点を据えながら、明らかにした上、すみれの「働き」の持つ意味にアプローチしてみる。

3.1 OL になったすみれ

¹⁰前掲石原千秋「〈家〉の不在—「門」論」P240

すみれとミュウは披露宴で知り合った。父親が経営していた貿易会社を 13 年前に長女であるミュウが引き継いだのだ。主な業務はワインの輸入であるが、音楽関係のアレンジメントもあるため、「日本とヨーロッパのあいだを行ったり来たり」する、とミュウがすみれに自分の仕事について話したり、すみれの能力や性格について聞いたあと、自分の会社で「しばらく仕事をしてみる気持ちはない？」とすみれを誘った。英語とスペイン語が堪能で、コンピューターが何とかなるという条件でミュウに誘われたのである。話は早い調子で進み、すみれはミュウの会社で働くことになった。そのことを唯一の友達である「ぼく」に伝えたく、「ぼく」と久しぶりに喫茶店で会った。別人のように変わったすみれの様子に「ぼく」が驚いた。その様子や、すみれから聞いた仕事に合わせる為の諸変化などを昔のすみれを比較するため、便宜上次のように並べてみる。

本来のすみれ	就職後変身したすみれ
髪を孤児みたいにくしゃくしゃにした。 口紅や眉ペンシルを手にしたことはない。	髪はクールなショートカットにまとめられている。
カーキ色のズボン。ブラジャーにサイズがあることさえ知らない。	ネイビーブルーの半袖のワンピースの上に、薄いカーディガンを羽織る。
左右合わない靴下をごまかして穿いている。	靴は中くらいの高さのヒールで、黒いエナメル。 ストッキングまで穿いている。
料理は作らないし、掃除もだめ。	どんな些細なことでも全力を尽くした。
ひっきりなしに煙草（マルボロ）を吸う。	煙草をやめようと決心した。
社会的常識と平衡感覚を身につけていない。	通勤電車に乗る。
世間知らず。	週に 3 回ミュウの会社に出勤する
小説を書くこと以外の人生は考えられない。	小説は書かなくなった。

上掲の表から、ミュウと出会ったあと、否、もっと正確に言えば、ミュウの会社への就職が決定してから、すみれがすっかり変ってしまったことは明らかであろう。就職する前は、髪に櫛も通さないし、口紅も「眉ペンシル」などの化粧品も知らず、「ブラジャーにサイズがあることさえ知らない」という、社会における女性一般の有り方や振る舞いを全く意識せず、「世間知らず」な女性であった。しかし、OL になったすみれは、表の右側にあるとおり、「クール」な感じの「ショートカット」のヘアスタイルに変り、「ネイビーブルーの半袖のワンピースの上に、薄いカーディガンを羽織る」、しかも「中くらいの高さのヒールで、黒いエナメル。ストッキングまではいてる」女らしい姿に変身してしまった。更に、ヘビースモーカーだったすみれは煙草を止め、週に三回出勤し（経済的に考え「来月から週に五日間働くことにする」と「ぼく」に話す。）、そのため電車に乗るように頑張っている。つまり、頭から足まで

の着こなしなどの外見のみならず、生活習慣、更に人生の目標まで著しく変わったのである。そのようなすみれの身の上の変化に「ぼく」は驚き、「以前のすみれとはべつの世界に属している人間のように見えた。」(P94)と語っている。

言い換えれば、すみれは一般に言う社会性に欠いた存在の女性から、社会性をそのまま反映している姿に変身しているのである。それらは凡て、すみれのミュウへの憧れ、「身を引くこと」ができないほど完全にミュウの虜¹¹になっている、ミュウへの愛の証であり¹²、すみれは自分を徹底的に変えてしまったのである。繰り返しになるが、ミュウに対する愛のためにすみれはそれまでの我を潰し、社会制度の枠に嵌められている会社という組織に迎合し、自らそれらの規範で自分を縛りつけたのである。

「僕の推定が正しく、あの言葉が「お母さん」なら、最後、すみれは、いわば母なるものに拒絶されていることになります。」¹³と加藤典洋が指摘したように、すみれの母親の象徴であるミュウ＝母親に「拒絶」された解釈ができるだろうが、ミュウに対するすみれの愛は身を滅ぼすまでも惜しくないほど激しいものであったには違わない。

3.2 経営者としてのミュウの「働き」振り

『スプートニクの恋人』ではすみれ以外に、ミュウの「働き」振りも見落としてはなるまい。男性中心というイデオロギーが容易には抜けられない日本社会では女性が仕事場で男性と平等に働くのは容易なことではない。況してや女性が会社を経営し、しかもヨーロッパという先進国へ自ら取引に赴いたりするのは極めての異例であろう。フランスなどのヨーロッパの国からのワインの輸入から国内の専門店へのおろしまで、またクラシック音楽の演奏家の招聘などの企画などが彼女の主な仕事の内容である。ワインの仕入先や若手音楽家のスカウトなどに彼女は積極的に携わるのである。有能な女性実業家であるその姿が容易に想像できるだろう。

すみれとミュウの恋に視座を据えて作品を読むと、「ミュウが本来の意味でのメディア（medium＝巫女）としての役割を果たしている。すみれは、「こちら側」と「あちら側」に「同時に密接に含まれ、存在している」と自分を定義していた。」¹⁴と、作品におけるミュウの役割、すみれとの関係として捉えることができよう。が、バリバリと仕事をしているキャリアウーマンとしてのミュウの姿はどんな意味を持っているだろうか。（１）まず、女性経営者というのは男性中心の日本社会に対する一種の対抗意識

¹¹例えば、その初対面の披露宴の席上で僅かな時間の会話を交した後、「この人に恋をしているのだ、すみれはそう確信した。」(P39)、または、「ミュウの真っ黒な瞳の奥に映っている自分自身の鮮やかな姿を、すみれは目にすることができた。それは鏡の向こう側に吸い込まれて行った自分の魂のようにも見えた。すみれはその姿を愛し、同じに深く恐れた。」(P61)などの描写のように、すみれはすっかりとミュウの虜になっている描写が随所に見られる。

¹²加藤典洋は『スプートニクの恋人』は、二つの恋の物語である。一つはすみれのミュウへの恋で、(中略)いわば、「超越したい、恋」。そして、もう一つは、僕のすみれに対する恋、この世にとどまろうという、「超越しない、恋」である。」と、ミュウへのすみれの恋のほか、すみれへの「ぼく」の恋だと作品のモチーフについて言及しているが、前者の方が圧倒的に激しい雰囲気が醸し出されているのは明らかであろう。加藤典洋『村上春樹論 イエローページ PART 2』2004. 5、荒地出版社、P073

¹³加藤典洋『行く者と行かれる者の連帯—村上春樹『スプートニクの恋人』』村上春樹論集②』若草書房、2006. 2、P185

¹⁴柘植光彦『円環／他界／メディア——『スプートニクの恋人』からの展望』村上春樹スタディーズ 05 栗坪良樹・柘植光彦編、1999. 10、若草書房 P35、36

が働いていると考えられよう。女性が男性に依存しないのみならず、立派に外国との取引をこなしている。(2) 更に、14 年前の「観覧車事件」以来、誰とも肉体関係を持たないミュウは結婚していながら夫とは性関係を持たない、週末に顔を合わせるだけの夫婦関係とは、従来の倫理観を覆している。そのような仕事場での地位に支えられたが故、夫婦の形を自ら決定することが許されたのではなかろうか。

4. 結び

80 年間ほど隔たってはいるものの、夏目漱石の作品にも村上春樹の作品にも高等遊民、ニートがしばしば登場している。小稿では、それほど鮮明ではないが、高等遊民につながる作品『門』及びニートの雰囲気漂う作品『スプートニクの恋人』を取り上げ、それぞれのキャラクターの「働き」を考察した結果を、以下のように纏めることができる。

・『門』の場合：

(1) 仕事場に背を向けるサラリーマン：二人の生計の大黒柱のように毎日役所に宗助が出掛けると設定されているが、「役所へ出掛けた」後、語り手が家に焦点を合わせて語る形式が目立っている。そして、役所での宗助の「働き」姿が意図的に省かれているのは即ち、汚い職場に宗助が背を向け、宗助の熱意が一向に見えない役所の仕事は彼にとっては労働力の提供と報酬の支給という労資関係しか成り立たない、それ以外何もないと捉えられよう。また、終盤の「官吏の増俸」「局員課員の淘汰」という宗助の吐露もそうした役所への批判と見なすこともできよう。

(2) 家庭主婦の「働き」へのクローズアップ

一方、男性中心の日本社会では家庭主婦の家庭を中心とする動きにライトが当てられないのは常なことである。が、『門』では宗助が出勤後の家の様子、御米の動き、殊に屏風の売買をめぐる古道具屋の亭主との交渉が鮮やかに描かれている。女性の活躍姿や、家事でも一家の円満を図る主婦の心身の苦労のクローズアップによって、漱石の珍しい女性への眼差しを感じ取ることができる。

・『スプートニクの恋人』の場合：

(1) すみれの OL の意義：社会とのかかわりをずっと拒んでいたすみれがミュウに出会い、ミュウの会社で働くことが決まってから、外見も生活習慣も社会の規範に合わせ、完全な OL に変身した。それは一見社会とリンクしたようにみえるが、それは、恋の相手であるミュウへの献身的な行為—我を潰すまでの犠牲—であり、期待に応えられないと断念した時点で、すみれは再び社会とのかかわりを遮断し、姿を消してしまったのである。その OL に変身したすみれの姿から、日本社会で働こうとする女性は我を抑え、様々な規範に否応なしに従わなければならないという社会現象も伺えよう。

(2) 経営者としてのミュウの「働き」振り：一方、男性に負けないほど仕事に励んでいる経営者として登場するキャラクターミュウのバリバリと働く姿は男性中心の日本社会への対抗意識の反映とも捉えられよう。そのような自立、社会的地位によって、ステレオタイプの夫婦関係を覆すのも可能になるのであろう。

80 年間ほど時代が変わったが、『門』にも『スプートニクの恋人』にも女性の生き方、日本社会における女性の存在に更に眼を注ごう、という両作家の眼差しが偶然にも一致している。

テキスト 『漱石全集』全 28 巻 1993～1999（岩波書店）

村上春樹『スプートニクの恋人』2008. 9、講談社

参考文献：

石原千秋「〈家〉の不在——「門」論」『漱石作品論集成 第 7 巻』1991. 10、桜楓社（初出『日本の文学』8 集 1990. 12 有精堂）

石原千秋「書き出しの美学（最終回）「こちら側」の自分はいつも孤独—村上春樹『スプートニクの恋人』『本が好き』37 号、2009. 7、光文社

内田道雄「「門」をめぐる—夏目漱石論（二）」『漱石作品論集成 第 7 巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991. 10、桜楓社、（初出「古典と現代」3 号、1958. 4）

江藤淳「「門」—罪からの遁走」『漱石作品論集成 第 7 巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991. 10、桜楓社、（「三田文学」46 巻 7 号、1956. 7、『決定版夏目漱石』1974. 11、新潮社）

押野武志「「平凡」をめぐる冒険 『門』の同時代性」『漱石研究 17 号』編集：小森陽一・石原千秋 2004. 11、翰林書房

片岡良一「『門』」『漱石作品論集成 第 7 巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991. 10、桜楓社（初出「春陽堂文庫『門』解説、1949. 12、『夏目漱石の作品』1955. 8、厚文社）

加藤典洋『村上春樹論 イエローページ PART 2』2004. 5、荒地出版社

加藤典洋「行く者と行かれる者の連帯——村上春樹『スプートニクの恋人』」『村上春樹論集②』若草書房、2006. 2

小宮豊隆『漱石と芸術』1973. 4（第一刷り 1942. 12）、岩波書店

瀬沼茂樹「『門』」『漱石作品論集成 第 7 巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991. 10、桜楓社（初出『夏目漱石』近代日本の思想家 6、1962. 3、東京大学出版会、『夏目漱石』UP 選書、1970. 7、東京大学出版会）

柘植光彦「円環／他界／メディア——『スプートニクの恋人』からの展望」『村上春樹スタディーズ』05 栗坪良樹・柘植光彦編、1999. 10、若草書房

西垣勤「『門』」『漱石作品論集成 第 7 巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991. 10 桜楓社、（初出「国文学」10 巻 10 号、1965. 8、『漱石と白樺派』1990. 6、有精堂）

深江浩「『門』論」『漱石作品論集成【第七巻】』1991. 10、編者赤井恵子・浅野洋、桜楓社、（初出『日本文学』24 巻 4 号、1975. 4『漱石長編小説の世界 1981. 10、桜楓社』